

価値観を変えたい  
「争点整理」で議論の楽しさを知る

法学部 牧田友梨子さん(中央大学杉並高校出身)



表紙の人

「4年間ですごく楽しかったのはゼミ。自分の価値観を

変える出会いがありました。こう断言する牧田さんが、ゼミ活動を通して、自分自身が大きく成長できたことと強調するのは、山内惟介教授のゼミだ。

山内ゼミで学ぼうと考えたのは1年生の時の必修講義がきっかけだった。山内教授の比較法文化論という

講義を受講したとき、大教室の最前列で活発に発言する学生の姿が目

留まった。その学生は、法学基礎演習1で山内ゼミに入り、勉強していた学生だった。自分の意見を相手に分かりやすく伝えるその学生の姿に、牧田さんは胸を熱くした。

「モチベーションが高く、能力ある学生が集う山内ゼミでぜひ勉強したい」。そういう強い気持ちに駆ら

れた牧田さんは、2年生になると山内先生のゼミに勇んで入った。

山内ゼミでは、毎週担当者一人が興味のあるテーマに関して報告を行い、その後、全員で議論する。テーマは自由だが、報告時には必ず「争点整理」という手段を用いて、問題解決を提示、発見するために、有効な最短距離を見つけていく。「争点整理」とは、設定した問題について、考えうる多くの解決策の中から、自らが示す解決案が最も有効であると考える理由を、判断基準をもとに明確に提示するというものだ。

また議論では、報告者は報告についての疑問や批判的な意見に対して、納得のいくような論拠をたてて返答することが求められる。

牧田さんは、「争点整理では、はじめは何が何だかわからない状態でした」という。どんな判断基準を示せば、皆が納得してくれるのかが分からないため、事前に争点整理をゼミの友人にチェックしてもらい、発表までに詰めるという作業を繰り返した。「そのうちに自分の思った

ことを率直に伝えることができるようになってきました」という牧田さんは、「皆で一生懸命に議論できるのが、山内ゼミの魅力です」と振り返る。

議論のテーマに女性問題を取り上げてきた牧田さんは、4年生の夏に、人身売買を解決するために活動するNPO団体が主催したスタディツアーに参加し、カンボジアを訪れた。「NPO・NGO団体は非営利団体だから、寄付金によって事業規模も左右されてしまう。支援者は自分の関心のある問題を支援する事業に寄付を行うが、その事業が現場のニーズと一致しているかどうかは別問題という現実がある」と実際に現地に行つて、新たな課題が見つかったという。

大学卒業後は、コンサルタントの道を進む。「まずは力をつけ、将来的にはNPO・NGOの事業に関して無料で相談に乗るプロフェッショナルボランティアという形で、女性問題への取り組みにも関わっていきたい」と牧田さんは笑顔で語り、前を見据えた。

# 自分を成長させたい人との出会い 国家公務員めざし、東大大学院へ

法学部 安藤貴洋さん(愛知県立時習館高校出身)



「先輩から『勉強ばっかりするな』って言われ、国家公務員志望なので、大学ではいろいろな人と会って話すように心がけてきました」。こう話すのは4月から

スに通うことが決まっている安藤貴洋さん。将来は「国家公務員として農林水産省に入省したい」としつかりとした志を抱いている。安藤さんは1年生から行政研究会に所属し、「大学の授業を中心に大

学生生活を送ってきた」という。そうしたなかで将来の方向を決める転機になったのが、星野智教授(政治学)のゼミと滝田賢治教授の国際学の授業だった。

「1年生の時に星野先生のゼミに入り、環境に興味を持つようになりまし

た。それまで漠然と外交をやりたいと思っていましたが、滝田先生からも『外交は国家公務員であればどの省庁でもできる。それプラス、具体的にやりたいものを探した方がいい』というアドバイスをいただいたき、環境に取り組みたいと考えるようになりました」

2年生からは研究会の委員長として組織の運営を行うことになった。「大変でしたが、責任をもたされて自分の欠点に気づきました」と安藤さん。リーダーとして組織の動かし方を学び、OBとの交流を通じて、「社会人との接し方、コミュニケーションの取り方も身に付き、人間として成長できたと思います」と振り返る。

その一方で、森林保護に関するボランティアに参加したり、趣味である美術館に行ったり、友人と遊んだり、積極的にキャンパスの外に飛び出し、見聞を広めていった。

「大学4年間を一言で表すと?」という問いに対し、安藤さんは少し

考えたうえで、「人との出会いですかね」と答え、続けて今度は確信をもって「研究室、ゼミでの人との出会いが自分を成長させてくれたと思います」と強調した。

「困ったときには誰かがきつと助けてくれる」と考え、勇気をもって行動に移すことができた。また、自分の考えが変わるきっかけをつくってくれたのも人との出会いだった。

「これからも出会いを大切にしていきたい」という安藤さんは、新たな展開が開け、自分を成長させてくれる人との出会いを求め続ける。

最後に先輩たちに対し、「いろいろなことに手を出すことも大切ですが、自分が本当にやりたいことをやり通す。本当にやりたいことを軸にしてそれを幹とし、枝をつけていくことが大切だと思います」とのアドバイスをいただいた。安藤さんのすっかりとした佇まいからは、大学4年間で頑丈な幹に枝を広げ、1本の大きな木に成長した自分自身に対する自信が感じられた。

(宮寺)

## 卒業後はメルボルン法科大学院に進学

## 『やる気応援奨学金』で国際感覚磨く

法学部 町田絵里奈さん(東京都立国際高校出身)



今春、オーストラリアのメルボルン法科大学院に進学する町田さん。その先に描いている夢、というより目標に据えているのは「国際連合やインターポール(国際刑事警察機構)で働く」ことだ。国際的

な仕事に目を向けている町田さんが大学4年間、フルに活用してきたのが法学部の「やる気応援奨学金」だった。

1年生の時にイギリスに3週間、法律英語を学びに語学留学し、2

年生の時には国際金融インターンシップで香港とシンガポールに合わせて10日間滞在した。3年生では公務員部門の奨学金を取得し、計3回「やる気応援奨学金」を利用した。「イギリスではアメリカ英語がなかなか通じず、奨学金で国際感覚を身につける恩恵にあずかった。」

「中央大学に入学してからすぐに『やる気応援奨学金』について調べました」というから、活用の仕方は計画的だった。そもそも町田さんが世界に目を向けるようになったのは、国際学科で学んだ高校時代で、中央大学に進学してからは国際的な活動に徹した。

サークルはALSA(Asian Law Students Association)に所属し、アジアの学生たちと各国の問題について英語でディベートを行ったり、日本の女性労働問題について英語で論文を書いたりした。韓国まで行き、英語でデイスカッションを行ったこともある。

ゼミは英米法の長内了教授のゼミに所属。メルボルン法科大学院に進学を決めた理由の一つには、長内教授の「国際機関を目指すには日本の大学を出たというだけでは足りない。専門性の高い教育を国際共通語である英語で提供する海外の大学院で学ぶことが必要だ」というアドバイスもあった。また同法科大学院がオーストラリアの中でも特にアジア法研

究に力を入れている、という点が、進学先を決定するうえでのポイントになった。

メルボルン法科大学院ではMaster of Lawsという社会人向けのコースで学ぶことにしている。このコースには30歳代から50歳代の社会経験豊かな人達が多く在籍する。

町田さんは、「同じ年の学生と学ぶのではなく、高い知識を持った人々と一緒に学ぶのは不安でもありますが、知識レベルの高い環境の中で学べるのが今から楽しみです」と目を輝かせる。

町田さんは「中央大学は本当に親身になって相談に乗ってくれる教授が多くて非常に助かりました」という。長内教授もその一人だ。最後に後輩に対して「就職難といわれていますが、不安にならずにどんどんチャレンジしてください。4年間はあつという間です。思い立ったことはずぐに実行に移すべきです。また国内にとどまらず海外にもぜひ行ってみてください」とアドバイスを送ってくれた。

(書問)

## 2つのゼミ活動で、社会的視野を広げる 刺激を受けた数多くの人との出会い

経済学部 増田香織さん(私立聖園女学院高校出身)



### 在

学中に2つのゼミに入っていた。一つは、国際経済学科

間で得たものの中で一番大きいです  
ね」と大学生活を振り返る。

の林光洋ゼミ、もう一つはFLP  
ジャーナリズムプログラムの松野良  
一ゼミだ。増田さんは、ゼミ活動で  
「多くの人に出会えたことが、4年

国際協力の林ゼミでは発展途上国  
が抱える貧困問題について取り組み、  
3年生の夏にはラオスに行き、現地  
調査を行った。ここでは教育の現状

を見ることができた。

「高校生のときに見たテレビ番組  
で、ウクライナのストリートトルド  
レンの表情をはじめ知った」とい  
う増田さんは、「貧困をなくすため  
の勉強をしたい」と考えるようにな  
り、経済学部の国際経済学科への進  
学を選択した。

ラオスでの現地調査で貧困の実態  
を見聞した体験に基づいて、4年次  
のゼミでは半年ほどの準備期間を経  
て、高校生に貧困問題を伝える活動  
を行った。「ゼミ生は、誰かのため  
に何かをしたいという気持ちを持っ  
た人が多く、本当に刺激し合える仲  
間でした」という。

一方、ジャーナリズムについて学  
んだ松野ゼミでは、「ストイックで  
タフな仲間と同じ時間を過ごすこと  
で、あきらめない気持ちが強くなり  
ました」と、ここでもゼミの友達に  
感謝する。

卒業後は、航空会社で特定地上職  
として働く。就職活動では、貧困問  
題を考えるきっかけになったテレビ  
で仕事をしたいと思って全国のテレ

ビ局に挑んだが叶わず、「もっと視  
野を広げて就職活動してみよう」と  
思い直した。

航空会社に関心をもったのは、F  
LPの取材で、大韓航空機爆破事件  
で息子さんを亡くされた母親に会っ  
たのがきっかけになった。「その方  
からお話を聞き、事件が風化してい  
くなかで、航空機の安全面について  
の関心が増していった」という増田  
さんは、いずれはコントローラーと  
いう社内資格をとって航空機の安全  
面に携わる仕事をしたいと考えてい  
る。

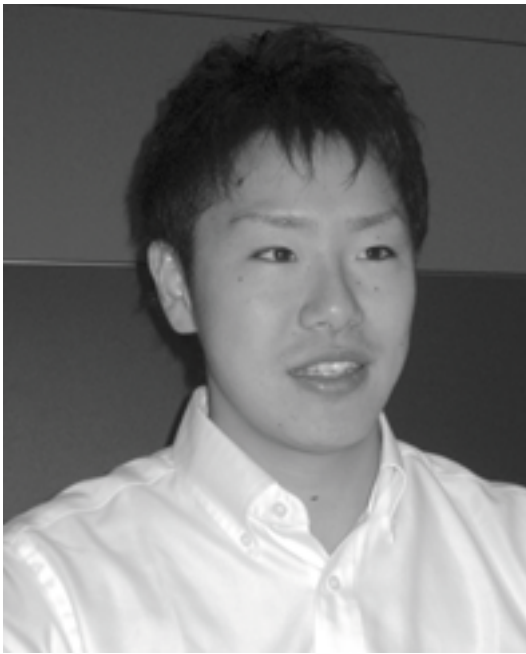
「在学中にやるべきことは英語の  
習得です。英語は視野を広めること  
ができます。時間がたくさんあるう  
ちに勉強しておくことです。あと、  
経験を積んで損はないです。いろい  
ろな場所に積極的に行って、いろい  
ろな人と出会って視野を広げること  
です」

こう語る後輩へのアドバイスには、  
キャンパスを飛び出して幅広く活動  
した増田さんならではの重みを感じ  
られた。

(加藤)

# 海外留学を一切しないで、英語力磨く キャンパス内で留学生と一緒ランチ

経済学部 伊藤友紀さん(山梨県立吉田高校出身)



「英語を使いこなす人は格好いい」。入学当初、こ  
う思い定めた伊藤さんは大学4年間  
で英語力を磨き、その「格好よさ」  
を身につけた。しかも海外留学は一  
切しないで、大学キャンパス内で抱  
いた目標を実現させた。

中央大学には指定校推薦で入学し

た。それもあって「1年生の春、明  
確な目標がなくて、受験せずに大学  
に入ったというコンプレックスがす  
ごくあった」という。そこで悩み、  
考え「大学4年間で何らかの形で結  
果を残してやろう」と思い至った。

「何らかの形」を英語に定めたの  
は、英語スピーキングの授業で、上

手く英語が話  
せない悔しさ  
があったから  
だった。「あ  
のときの衝撃  
と負けず嫌い  
精神で4年間  
頑張れた自分  
は、結構単純  
な人間なんだ  
なあ」と言っ  
て伊藤さんは  
笑う。

小さい頃からずっと野球に打ち込  
んできた。大学に入ってからもすぐ  
に軟式野球の強豪「多摩川野球会」  
に入会。週1回の練習と週末の試合  
を4年間続けた。

「英語も上手になりたいけど、野  
球も頑張りたい。これを両立させる  
には、語学留学は選択できなかった。  
別に海外留学だけが手段じゃない。  
日本にいてできる勉強方法はたくさ  
んあると思った」

そこで伊藤さんは、中央大学で学  
んでいる留学生に声をかけて、一緒  
にランチを食べることに挑んだ。会  
話は半分が英語で、半分が日本語。  
文字通り give & take でお互いの語  
学力を磨く。この方法は、英会話を  
上達させる手段としては非常にシン  
プルではあるが、他人にいきなり話  
しかけてご飯に誘うには、それなり  
に勇気と度胸が必要だ。

「最初は、初対面の留学生に声を  
かけるのは恥ずかしかった」という  
伊藤さんは、「留学生は日本語を学  
びに来ているから、こっちが英語を  
学びたいオーラが全開だとうまくい

かない」ことに気付き、まずは日本  
語で話しかけるようにした。そのう  
ちに「恥をかくことが英会話上達の  
最大のコツだ」と得心した。

よく一緒にランチを食べるように  
なったのは10人。そのなかで特に仲  
良くなったのは英国人の2人。2  
人ともすでに帰国してしまったが、  
メールのやりとりは今でもしている。

半年に1回受け続けたTOEIC  
の成績は、入学時の330点から8  
30点までのびた。TOEICを受  
けたのは「モチベーション維持のた  
めには目に見える結果が必要だっ  
た」からで、「試験前に過去問を解  
いたくらいで、知らず知らずのうち  
に成績が上がっていた。国内にいて  
もここまでできる。そう証明でき  
よかった」と伊藤さんは胸を張る。  
4月からは建設重機を販売する大  
手企業で働く。「世界で勝負したい」  
と伊藤さんは、大学生活で磨いてき  
た英語力を武器に世界のグラウンド  
へ踏み出す。

(中野)

## 入学時から「人」と「自然環境」に関心

## 一橋大学大学院に進学、研究者を目指す

経済学部 湊 誠也さん(都立北多摩高校出身)



**今** 春、一橋大学大学院(経済学研究科)に進学する。研究者への道をまっしぐらに進む。夢は、人と自然環境に関わる研究者になることだ。

湊さんは、自然に恵まれている青梅で生まれ育った。自然環境に興味、関心を持ったのは、そんな生活環境にあったためでもある。「昔から人と自然は共に歩んできた」という。中央大

学経済学部を進学先に選んだのは、「環境」の分野に力を入れていることが決めた手になった。文明の発展に伴う「経済活動」と「環境問題」は、切っても切り離せない関係に

あると考えたからだ。

公共・環境経済学科では、2年生から中国農業が専門の山本裕美教授の「環境問題」に関わるゼミに所属。そのゼミ活動に取り組むかたわら、経済学基本書をはじめ新聞や経済関係の論文などを読むことに努めたという。2年生の夏休みには、イギリスに3週間、語学留学した。そこでいろいろな国からきている人々との交流を通じ、自分自身の視野の狭さともを聞く術の大切さに気がついた。

帰国後は大学院進学を視野に入れ、勉強に励んだ。3年生の半ば頃には、川島康夫教授の大学院の授業も受講。川島教授との1対1の授業もあれば、実際の大学院生とともにハイレベルな議論にも自ら進んで参加した。

「大学では自ら主体的に取り組むべきです。中央大学は各分野に優秀な先生方がいます。そのような恵まれた環境をいかし、自分の将来を見つめ、何を学びたいのか、をしつかり考えて主体的に動くことが重要です」

また、立教新座中学・高等学校の渡辺憲司校長が昨年、卒業式を中止した際に、高校3年生に送ったメッセージだという、「大学に行くのは『海を見る自由』である」という言葉を引用し、「大学の4年間は自分の時間をどのようにコントロールし、自分の力を変えていくかです」と語ってくれた。

湊さんの後輩へのメッセージには、大学入学時から常に目標を定めて、積極的に課題に取り組んできた湊さんならではの思いが込められていた。大学生活では学業に力を入れる一方で、湊さんは3年生の時から地元消防団にも所属し、忍耐力を鍛えた。この消防団の活動を通して、集団行動の大切さ、規律を学んだという。

この消防団に大学生で所属していたのは、湊さんだけだったそうで、これからも湊さんは何事にも「熱い心」で「主体的」に取り組む姿勢で、研究者への道を着実に歩んで行くことだろう。

(梶原)

# 入学時に目標もって生活すると決意 初志貫徹で3回の留学で英語力磨く

商学部 谷 一磨さん(群馬県立桐生南高校出身)



## 「夢

の中央大学に入学するこ  
とができた時、4年間目  
標を持って生活しようと決意しまし  
た。こう言って入学当初を振り返  
る谷さんは、その初志を貫徹し、学  
4年間で3回留学、英語力を磨いた。  
1回目は1年生の夏休みに米カリ  
フォルニア州でのワークシヨップに

参加した。台湾、中国の大学生とス  
タンフォード大学の学生と一緒に  
なって、ホームレスやその支援者に  
話を聞き、貧困問題について学び、  
1カ月間グループワーク・プレゼン  
テーションを行った。

しかし、「僕の英語は通じなかつ  
た」と谷さん。台湾や中国の学生が

英語を上手に話  
し、しっかり意  
見を述べる姿に、  
感心すると同時  
に、「世界を舞  
台にするには最  
低限、英語で自  
分の意見を述べ  
られるレベルに  
達しなければな  
らない」と痛感  
した。

そして2回目

は1年生の春休みにはフィリピン・  
セブ島の語学学校に留学した。そこ  
で行われたスピーチコンテストに優  
勝して自信がつき、2年生になると  
アメリカ留学に必要なTOEFLの

勉強を本格的に始めた。商学部のT  
OEFLE専門の授業、LL特設講座  
を受講。加えて朝6時から授業が始  
まるまでの時間と、アルバイト後の  
夜11時以降に勉強した。「TOEFL  
Lは難しい試験でしたが、共通の目  
標を持つ優秀な仲間と熱心な先生の  
おかげで乗り越えられた」という。

その結果、2年生の1月から1年  
間、商学部のチャレンジ奨学金を利  
用して米カリフォルニア州立チコス  
テート大学に認定留学した。留学当  
初は「簿記はやったはずなのに、会  
計の授業はほとんどわからなかつ  
た」が、図書館で予習復習し、授業  
でも積極的に質問するように心がけ  
た結果、留学生では難しいとされる  
A評価を多数とることができ、国際  
会計の資格を取得することにも成功  
した。

「最後の期末試験になるとプレゼ

ンテーションのリーダーとしてアメ  
リカ人を束ねるまでになりました。  
自分を認められたことが自信になっ  
た」と谷さんは語る。

3年生の1月に帰国して就職活動  
をはじめた谷さんは、大手自動車  
メーカーの内定を得たが、自分が夢  
中になれ、若いうちからできるだけ  
多くの経験が積める会社に勤めたい  
との結論に至った。その結果、希望  
の經理の仕事を入社半年前から体験  
させてくれ、入社後は直ぐに責任あ  
る仕事を任せてくれるエンターテイ  
メント系の会社に就職することを決  
めた。まずは日本で社会人としての  
基礎を積み、「将来はアメリカで働  
きたい」という。

「4年間は出会いに支えられまし  
た。留学のきっかけをつくってくれ  
たのは先輩だったし、TOEFLの  
勉強も仲間と先生なしではできな  
かった」と谷さん。後輩にも「中央  
大学は学生と先生の質が高いし、望  
めば何でもできる、そんな中大をフ  
ルに活用してほしい」とメッセージ  
を送った。

(佐武)

## 演習論文大会プレゼン部門で学部長賞受賞

## 2年間の積極的なゼミ活動が成果を生む

商学部 島夕紀子さん(山梨県北杜市立甲陵高校出身)



「ゼミを通して一つのことをやりとげたことで、頑張ってきたことを形として残せたという満足感があります」。こう語る島さんが、形にして残したというのは、2011年12月3日に開かれた商学

部演習論文大会のプレゼンテーション部門で学部長賞を受賞したことだ。審査員の教授陣を含む聴衆約30人の前で、島さんは卒論テーマの「日本企業における現金保有の決定要因」について20分間のプレゼンテーションを行った。

商学部演習論文大会は、プレゼン部門と論文部門がある伝統のある大会で、歴代のゼミの先輩方が参加していたこともあり、掲示板の案内を見て、自らエントリーし、晴れて受賞に輝い

た。

島さんは3、4年生の2年間、本庄裕司ゼミで企業の経営戦略を学んだ。3年生ではグループワークを行い、9月の夏合宿と12月の演習論文大会の年に二つのイベント参加が、大きな目標になった。その経験を土台に、4年生では卒論に取り組んだ。

「3年生の時は勉強が大変でしたが、周囲から刺激を受けるグループワークは楽しかった」と振り返る。一方、4年生では、卒論執筆のために「全てを一人でやらなければならぬ」という新たな苦勞に直面したという。「途中で投げ出したくなるほどでしたが、メリハリのついた生活を意識するようにしました」と自己管理も怠らなかつた。

そんなとき後押ししてくれたのが、本庄教授やゼミ生だったという。「先生にはいつも的確なアドバイスをいただきました。ゼミ仲間からは頑張ろうという気持をもらいました。学部長賞を受賞できたのは、周りの人たちのおかげです」と感謝の気持ちを忘れない。

ゼミで養ったチームワークとプレゼン能力は、就活でも大いに役立った。グループワークでの「様々な意見を聞いたのちに、方向性がずれないように意見をまとめる」という経験が、就活中のグループワークでも活かされ、「困ることはなかつた」。限られた時間で話すことを求められた時も、プレゼンでの経験を大いに活かした。



# ポジティブにテニスと会社経営に邁進 MBA取得し、日合ビジネスの架け橋に

商学部 劉 世彦さん(都立翔陽高校出身)



**テ**ニスと会社経営。大学4年間  
は学業に加え、この二足のわ  
らじで貫き通した。二つの間には何  
の関連性もなさそうにみえるが、劉  
さんは「テニスをやることで体力も  
つくし、頭もクリアになった」と事  
業を興し、ビジネスを進めるうえで

も相乗効果があったと笑顔で話す。  
両親が台湾人で、国籍が台湾の劉  
さんは日本で生まれ、日本で育った。  
「ずっと何か目標を持ってやってき  
たので、逆に何もやっていない時の  
方が落ち込みます」と常にポジティ  
ブに前を向いている。

入学と同時に  
硬式テニス部に  
入部し、1、2  
年生の時は毎日  
朝から晩まで練  
習に明け暮れた。  
しかし、そんな  
テニス一筋の大  
学生活に転機が  
訪れる。他大学  
に通う同い年の  
友人と「起業」  
をすることにし  
たのだ。「商社

の方を紹介してもらえる機会があり、  
その関係で取引をしてもらえること  
になりました」という。

少し唐突にも思える起業のウラに  
は高校生の時からずっと抱いてきた  
思いがあった。共に起業した友人と  
は小学生の頃からの幼馴染であり、  
親友。そんな彼と高校生の時に、「世  
の中に驚かれることをしたい」と夢  
を語り合っていたのだという。それ  
が大学2年の時に「起業」という形  
で具体化することになる。

スタートは商社の販売代理店とし  
て、飲料水やボディソープ、洗顔  
フォームの販売を行った。その後、  
ワインのネット販売や、プロモー  
ションも手掛けるようになった。「自  
分の中でどんなビジネスが良いか分  
からないから、色々やってみていま  
す。まだまだ試行錯誤中です」とあ  
くまでもポジティブだ。

様々な事業を手掛けているのは、  
「いろんな分野に触れて自分を成長  
させたい」という思いもあるからだ。  
「社会的に存在意義のある会社にし  
たい」と目標は高い。

例えば、昨年3月の東日本大震災  
後に水道水から放射性物質が検出さ  
れ、乳児の粉ミルクに使用するため  
のミネラルウォーターがスーパーの  
店頭から消えた時、劉さんは品薄に  
なったミネラルウォーターを探し求  
め、それを消費者に直接販売した。  
利益は出なかったが、「今、一番困っ  
ている人たちに水を届けたい」との  
思いからだ。

劉さんは卒業後は会社経営を続け  
つつ、9月から台湾のビジネスス  
クールに留学する。MBA(経営学  
修士)の取得と合わせ、ビジネスレ  
ベルの中国語の習得と、世界から集  
まる人たちとの交流を通じ、人脈を  
築くことが目的だ。加えて日台間の  
ビジネスコンサルタントを目指し、  
「日本の中小企業の輸出を仲介する  
ために現地企業の開拓を行う」つも  
りだ。

大学4年間でたくさんのお会いを  
求めてきた劉さんは、これからも持  
ち前の社交的な性格とフットワーク  
の軽さを活かして夢を追いかける。

(望月)

憧れの教師への道にまっしぐら  
やりくりをして教職課程を履修

理工学部 平本奈津子さん(神奈川県立麻溝台高校出身)



## 教

師になる目標を抱いて中央大  
学理工学部に入學し、ただで

さえ忙しい授業の中に教職課程を組  
み入れ、努力の甲斐あつて教員採用  
試験に合格した平本さん。「生徒1  
人1人と平等に接することができる

教師になりたい」と、この春から憧  
れの教師としての道を歩み出す。

母親が小学校の教員という環境で  
育つたが、高校までは教師になりた  
いとは思っていなかった。「母の生  
活を見ていたら、体力的にも精神的

た実験がとても興味深く、教師にな  
りたいと思うきっかけを与えてくれ  
ました」と話す。

志を持つて大学に入學したものの、  
理系だけに授業に追われる。そのな  
かで教職課程も履修するのは大変  
だった。「2、3年生のときは教職  
の授業のため平日は毎日19時半に授  
業が終わるという状況でした」と苦  
笑い。加えて通學に片道3時間かか  
るため時間的制約はさらに厳しかつ  
た。「バイトを休日を持つてくるな  
ど工夫して時間のやりくりをしまし  
た」という。

4年生になると3週間の教育実習  
があり、さらに忙しくなった。「大  
学の研究室での課題が教育実習期間  
はできなかつたので、かなり後を  
取つてしまいました。この時期が大  
学生活で一番大変でした」と振り返  
る。

教育実習では「教師という仕事の  
大変さを身を持つて実感しました。  
精神的にも大変でした」と教育現場  
の実情を肌で感じた。その中で平本  
さんが一番嬉しかったのは、「生徒

が私に積極的に話しかけてくれた」  
ことだった。「生徒たちが今思つて  
いることを素直に話してくれたんで  
す。教師になったら、生徒との距離  
が近い存在でありたいと思うようにな  
りました」と自分なりの教師像を  
描いた。

晴れて教員採用試験に合格したと  
き、「母親は嬉しそうに『良かった  
ね』と言つてくれました」と語り笑  
顔で表情を崩す平本さんは、「教師  
になったら保護者との連携に力を入  
れていきたい」と意気込む。「例えば、  
夜遅くに散歩している子、喫煙、飲  
酒をしている子は学校だけでは管理  
できない。だから保護者とコミュニ  
ケーションを取つていくことで問題  
解決をしていかなくはない」と  
強調する。

「それと理科離れが深刻になつて  
いるので、高校時代に教えていただ  
いた理科の楽しさを今度は私が、生  
徒に教えていきたい」とも語る平本  
さんは、教師として社会人のスタ  
ートを切る4月を心待ちにしていた。

にも大変そ  
うだった」  
からだ。し  
かし、高校  
時代に出  
会つた理科  
の先生の授  
業に魅せら  
れて、その  
考えは次第  
に変わつて  
いった。「先  
生が授業中  
によく見せ  
てくださつ

(田中)

## 生命科学科一期生として研究に没頭

## 努力評価され、総合水処理会社に就職

理工学部 二村龍之介さん(神奈川県立鎌倉高校出身)



「やりたいことに全力で向かう」。大学生活4年間で大切なことは、という質問に対して二村さんはこう断言した。事実、二村さんにとっては、研究室での研

究を中心に自分のやりたいことをやり抜いた4年間であった。

二村さんは理工学部生命科学科の第1期生として中央大学に入学した。「授業内容について先輩に教えてもらうことができなかった

ので、初回の授業には

全て出て、そこから履修する科目を選択していききました」と1期生ならではの悩みもあった。

その一方で

「実際に授業を受けてみると、教授一人に学生が8人程度というゼミのような授業もあり、か

なり学生と教授との距離が近いと感じました。生命科学科の魅力のひとつですね」と少人数の授業の良さも感じた。

「もともと生物が好きだった」という二村さん。2年生の時、諏訪裕一教授の授業で排水処理場に見学に行った際に、「微生物によって排水中の有機物を処理する、その反応過程に興味をそそられた」と、その仕事に感銘を受けた。このときから卒業研究は諏訪教授の指導のもとで行うと心に決めた。

4年生になり諏訪研究室での卒研が始まった。ここで、「実験」という言葉の重さを実感する。2、3年生のときは配布された手順書を読んで実験すればよかったが、4年生では1から自分自身で実験を組み立てなくてはならなくなった。

「何をどれだけのを準備しなくてはいけないかなど、全て自分で決めなくてはいけません。初めのうちはとても苦労しました。英語の論文を読んで実験の手法を学んだり、諏訪研究室に来る他大学の研究者に手

順書をもらったりして努力しました」

二村さんは、2005年に諏訪研究室が発見した「茨城県北浦の『anammox』の活性」に関するプロジェクトにも参加し、研究に没頭した。「それは重大な発見で、anammoxの活性が異常に高い場所が見つかったのは世界で初めてなんです」と興奮しながら語る。

『anammox』とは、工場排水などに含まれるアンモニア態窒素や亜硝酸態窒素を無害な窒素に変える働きをする微生物だ。この微生物を用いるとコスト削減や排水処理の際に発生するゴミ(余剰汚泥)を従来法に比べて最大70%削減できるメリットがあり、世界的に注目されている。二村さんは、就職活動で苦労したというが、最終的に『anammox』

による排水処理を国内で初めて実用化した会社に内定を得た。大学での研究が活きて、評価されたのだ。二村さんは、大学時代の勉強を生かせる仕事で、新たな一歩を踏み出す。

(田中)

# 学習支援ボランティアを3年間体験 小学生からの「教師になる」夢を実現

文学部 田中日香里さん(私立桐朋女子高校出身)



**小** 学生の時に描いていた教師になるという夢が実現する。田中さんは今春、晴れて東京都の小学校教員に就く。

「小学生当時、自分に自信が持てなかつたときに、担任の先生に『足が速い』と褒められて、リレーの選

手になったんです。それで自分自身にも自信が持てるようになりました。それから先生にあげられて、ずっと教員志望できました」

一途に教師になることを目標にしてきた田中さんが、中央大学文学部に入学したのは教員免許取得支援が

しっかりしていたからだ。「大学4年間は勉強が楽しくて仕方がなかった。今までは受け身の姿勢だったけれど、大学では何かを吸収してやるうという気持ちで授業に臨みました」と振り返る。

1年生からサブゼミとよばれる、学生のための自主ゼミに参加し、3年次にはゼミ長を務め、主体となって社会と学校の関わりを研究した。「客観的に教育を見直すことで様々な問題が見えてきました。社会問題化しているモンスターペアレントなどもその一つ。教育がサービス業化していると感じます」と話す。

2年生から中学校の学習支援ボランティアに参加し、4年生の夏からは不登校児の学習支援も行ってきた。「ボランティアを通して授業を観察することで、生徒がどこで興味を示し、どこで飽きているのかわかるようになりました」とボランティア体験の成果は大きかった。「教員になるうえで大きな強みになった」という。

「生徒に苦手なところがあるとき

は、やみくもに叱るのではなく、その子の目線に立つて考えることが大事なんです。ちゃんとわかるまで考えさせることが重要です」と教師としての立場を自覚した。

教職課程での教育実習では国語を担当。「指導は上からの一方的な指示という形ではなく、親子のように自分の気持ちを伝えられる横の関係を築くことを心掛けています」と語り、教師としての姿勢も芽生えた。

理想の教師像は「子供の可能性を引き出す教師」という。「小学生時代はまだ未成熟な部分ばかりですが、その分、可能性が沢山あります。様々なことを吸収する時代に間違った限界を与えないことが教師の役目だと考えています」と真剣なまなざしで語ってくれた。

座右の銘は「努力に勝る天才なし」。父親から教わった言葉で、これまでも努力することで何事も掴み取ってきた。田中さんは教員になっても努力を怠らず、子供のために尽力していく覚悟だ。

(小笠原)

# 1年間のフランス留学で見聞広げる 卒論は給食がらみる日仏の食育比較

文学部 三田祥世さん(私立星野高校出身)



「中 央大学には充実した大学生活をおくるための制度が整っているので、是非利用してほしい」。こう語る三田さん自身も、文学部の給付奨学金と交換留学の制

度を活用して、3年生の後期から4年生の前期までフランスに1年間留学した。

「高校の修学旅行でフランスを訪れ、景観政策に力を入れた綺麗な街

並みに心を惹かれ、フランスの文化を学びたいと思っ

た」という。

留学先を選んだのはフランスのトゥールーズミラーユ大学。留学

した当初は、「フランス語を話すこともできないし、英語も通じな

かった」と当時を振り返る。留学中は「フランスで、日本に関わることをしたい」と考え、「日本語のオーラルを学ぶ学生の練習相手をしたり、フランス語の論文を日本語に訳したりというボランティアをしていた」。

また留学中の昨年3月11日、日本で東日本大震災が発生。「日本のために何かできることはないだろうか」と考えた三田さんは、トゥールーズに住んでいるパティシエと200人前のケーキを製作販売し、その売り上げを日本に寄付した。

「フランスでは日本の文化が人気ですが、それ以外の面にも目を向けてほしいと思っていました。ところが震災後に活動していく中で、日本を心配してくれる人や日本に向けてメッセージを書いてくれる人が多くいて、逆に考えさせられました」

帰国後、フランス留学で学んだことを活かし、フランス語で「給食から見る日本の食育とフランスの食育の比較」という卒業論文を書き上げた。

「フランスの料理は美食と呼ばれ

ている割には、ファーストフードの流入もあって料理ができない若者、本当のフレンチを知らない人が増えています」とフランスの食文化の実情を紹介。そのうえで「乱れた食文化を立て直して、伝統的な食文化を取り戻したい。また、食からコミュニケーションへと広めていきたい」と卒論のねらいを語ってくれた。

4月からは金融関係の仕事に就く。留学中にもフランスから個人的にメールで関心のある企業にアプローチをしていたが、本格的な就職活動は、帰国した4年生の6月末から始めた。「最初はフランス語を使える仕事も考えた」というが、「趣味としてフランス語を使えたらいいな」と考えた」と三田さんが、最終的に選んだのは金融関係だった。

最後に後輩達に対して「やりたいことに挑戦してください。失敗しても大学時代は許される。その体験が10年後どのような意味を持つかはわからないが、体験してみることが大事です」とアドバイスを送った。

(藤森)

# 陸上男子短距離を全国トップに牽引 キャプテンとしてチーム力向上を図る

文学部 河合元紀さん 東大阪大学柏原高校出身



**中** 中央大学陸上競技部の男子短距離は、いまや全国の大学トップの実力を誇る。男子4×100m

リレーでは、2010年5月の関東インカレで38秒54の日本学生新記録を樹立して24年ぶりに優勝。2011年9月のインカレでも38秒85で優

勝した。河合さんは、いずれもこのときのリレーメンバーで優勝に大いに貢献した。

中大は2011年10月の日本選手権リレーでも4×100mリレーで優勝、名実ともに真の日本一を飾った。「優勝できるとは本当に思っ

なかつたです」と語る河合さんは、キャプテンとしてもチーム全体を引っ張ってきた。短距離がここまで強くなつたのは、「練習方法の変化です」とい

う。そのきっかけをつくつたのが河合さんで、「高校時代にとっても良い先生に出会えて、その時の練習を生かしていったんです」と高校で教わった方法を大学での練習に取り入れた。

その練習というのは、なるべく長い距離を走らない、体幹（腹筋、背筋など）を重視して鍛える、というもので、中学から陸上を始めた河合さんにも「今までの練習にはなかつた」もので、その効果は大きかつた。そこで大学1年から、練習メニューを決める4年生に、この練習方法をどんどん進言していった。

「4年生がすごく良い人たちで、メニューに取り入れてくれたんです」と河合さんが提起した練習方法は、学生主体で行っている中大の練習に浸透していった。

「中大は目立つ選手が多いんです。だから、そういう選手だけに目がいきがちですが、あまり実力のない選手たちにも目をかけて、一緒に練習することを大事にしていました」。キャプテンとしてチーム全体の力の

向上を図ることに心がけた。

「陸上は個人競技だと思われがちですが、実は団体競技なんです」と断言する。そこで、個人での練習よりもチームとして練習を行うことを大事にしてきた。平日は選手のスケジュールがバラバラなので、同じ時間割の選手を見つけては、一緒に練習するように進言してきた。また「厳しかった上下関係をゆるくして、後輩たちも練習がしやすい環境をつくっていきました」とチーム内の雰囲気づくりに努めた。

「自分のタイムが伸びたときより後輩のタイムが伸びたときのほうが嬉しかったです」と語る河合さんは、実は、体を動かすことがあまり好きではなかつたという。陸上競技を続けてきたのは、「自分のできることをひとつ見つける」という父親の言葉を励みにしてきたからだ。

卒業後は大手電機メーカーで営業職に就く。「陸上は大学までと決めていたので未練はないです」と河合さんは、4月には社会人としてのスタートラインに立つ。（齋丸）

ゼミでの活動、研究が大きな自信に  
入学時に掲げた充実した4年間送る

総合政策学部 矢口さほりさん(私立嘉悦女子高校出身)



「少

人数教育で、多彩なジャ

部

に魅力を感じました」。こう語る

矢口さんは入学時から明確な目標を

もって大学生活に臨んだ。それは「た

だ大学に『居る』だけという4年間

にしない」ということだった。

そう考えて矢口さんが積極的に取

り組んだのは、2年生の4月から

じめたゼミ活動だ。総合政策学部の

中でもとくに忙しく、厳しいといわ

れる細野助博教授のゼミに身を投じ、

演習テーマ

である公共

政策の問題

に取り組ん

だ。

公共政策

とは、「町

づくり」を

検証してい

くというも

ので、ゼミ

では「企画

「課外活動」

「論文制作」

など様々な

プロジェクトを行い、且つそれぞれが連携して活動し、その中心となる活動は、キャンパスの外に出て、実際に「町づくり」に携わることだ。

矢口さんのゼミでは大学近隣の町の商店街のイベントを手伝うとともに、ワークショップを主催して商店街の問題点について町の人々と話し合った。このワークショップでは、事前に予測していた問題点だけでなく、商店街の方々の生の声を聞くことで、初めて知ることができた問題点もたくさんあったという。

「イベントのお手伝いや商店街の人々と接していくなかで、私たち学生に対してははじめは好意的な方ばかりではなかった」というが、何回も足を運んでいくうちに、「次第に心を開いて接して下さるようになったのが嬉しかった」と振り返る。「大学に在るだけでは知ることのできないことや、普段関わることのできない社会の方々や接して学んだことは大きかった」と活動の成果を強調する。

3年生になると活動は益々本格化

し、論文の制作も始まり、1週間のうちゼミに行かない日はないというくらい忙しい毎日だった。10月に岐阜県で行われた全国の大学生による「公共政策フォーラム」で、矢口さん

は細野ゼミを代表して論文の研究発表を行い、見事準優勝を果たした。「ゼミの仲間との論文作成は、チームで協力して何かを遂行することの難しさ、大切さを教えてくれました。それから、『君たちに成功は求めている』と失敗に関係なく様々なチャンスを与えてくれた細野先生にはとても感謝しています」

大学生活で一つのことを真剣にやり遂げた経験は、大きな自信になり、就職活動では4年の5月に金融機関の内定を得た。「大学生活、そして就活で後悔しないためには、フットワークを軽くして人より一歩でも多く足を運んで情報を得ることが大切。このことを教えてくれたゼミは生涯の宝物です」。そう語る矢口さんの表情は悔いのない大学生活をおくれた充足感にあふれていた。

(熊谷)



## ゼミとサークルの活動に全力投球 福生市とのプロジェクト代表務める

総合政策学部 竹中智広さん(神奈川県立川和高校出身)

### 「様

々な分野を学びたかったし、なにより人とかかわりたかった」と語る竹中さんは、理系志望だった大学進学を文系志望に切り替え、一浪して総合政策学部に入學した。そんな竹中さんの大学生

活は、ゼミ活動とサークル活動に全力投球した4年間だった。

サークルはアカペラサークルに所属。サークル内で発表会にむけ、それぞれチームを組み、1チーム平均週2〜3コマの練習をこなす。竹中

さんは学祭時には5チームほど組み、昼休みなども利用しながら週10コマほどの練習に励んだ。ゼミは総合政策学部の細野助博ゼミに所属し、地域活性化につながる街づくりについて研究した。幼いこ

ろに、いろいろな街で暮らした経験から、竹中さんは昔から街づくりに興味があった。たまたま、1年生のときに聞いた細野教授の街づくりに関する話が面白かったことがきっかけで細野ゼミに入った。

ゼミでは、福生市や市内中学校とコラボした『福生わが街の宝探し』というプロジェクトの代表をつとめたことが一番印象に残っているという。キャンパスを飛び出して実践的な活動を多く積み重ねることで、地方法自治体の行政や地域住民とのかわりに触れることができた。「毎週火曜日と昼休みにゼミのミーティングがあつて、ゼミにかけた時間は長かったですね」と振り返る。

細野ゼミはOBとのつながりも強い。例えば、春合宿ではゼミの卒業生に就活の模擬面接をしてもらい、「ここが良い、そこが悪い」といった社会人目線の意見を聞くことができ、大変役に立った」という。「ゼミでは責任感を身につけることができたし、OBの方々の話を聞くことで社会人力もつきました」とゼミに

対する思い入れは強い。

そんな竹中さんだが、ゼミに入った当初は「自分の考えていたのと違い、嫌でも投げ出したくなつた」という。ただ、それも2年次に「環境教育プロジェクト」に取り組んでから変わった。「終わつた時に、何とも言えない達成感がありました。目的意識が芽生えはじめたら、ゼミの活動がぐんと楽しくなりました」と自分自身の変化にも気がついた。3年次に福生市とのプロジェクトで代表を務めたのも、それがきっかけになった。

大学生活を充実させる秘訣を聞くところ、「目標や興味のもてることを見つけ、自分なりに考えて行動に移すことです。大学に入學したのだからバイトだけに時間を費やすのはもったいないと思います」とアドバイスをくれた。

4月から民営鉄道会社に就職する竹中さんは、将来は、街全体を幸せにできるような会社のプロジェクトに取り組みたいと、希望に胸を膨らませている。

(野村)



# 陸上関東インカレで3冠、MVPに輝く

## ロンドン五輪目指し、100m9秒台狙う

法学部 川面聡大さん(東京都立高島高校出身)



「河合に追いつき、抜き、勝つことが1年生からの目標でした」。川面さんは、陸上競技部での4年間を振り返りながら、ま

ずライバルだった河合元紀選手の名前をあげた。同学年の河合選手とは、

ともに大学ナンバーワンの中大短距離陣を牽引してきた仲の良い友人でもある。

「中大に入学した時点では一番遅かった」という川面さん。高校では

中央大学にスポーツ推薦で入るのは難しかった。それでも「勉強も陸上もともにレベルが高い」中大への進学をあきらめきれず、大学側が入学の条件にした「日本ジュニア出場」を懸命に練習して

見事にクリアし、晴れて入学を決めた。

入学後、1年生では関東インカレやインカレで河合さんが入賞するのを悔しい思いで見ているという。「2年生でフォームを改造し、ようやく花開きました」と当時を振り返る。

「自分で考えて、何が必要かを意識するようになりました。頭を使っているように感じました」と自己改造を強調する。

自分で練習メニューをたてて、自分がこうしたいと考えて走る練習をしてきた川面さんは、「走りは洋服みたい」と解説する。何が足りないかを常に考えて、これと思うのを選んで走ってきたからだという。それには1年生のときから、日頃の練習などで気付いたことを記録している手帳が大いに役に立った。

こうした練習の成果は、見事な結果に繋がった。2010年5月の関東インカレで、3年生だった川面さんは男子4×100mリレーに2走で出場、中大チームは日本学生新記録で優勝したのだ。4年生になり、

さらに大きな記録を残した。2011年の関東インカレで、川面さんは男子200mにおいて20秒56と世界選手権A標準記録を突破して優勝。男子100m、男子4×100mリレーに続く3冠を果たし、大会最優秀選手(MVP)に輝いた。

「一番印象に残っているのは関カレの3冠です。自分のやってきたことが間違いないと証明できた。雑草ランナーとして、頑張れば遅い選手にも可能性があるということを教えられたと思います」

陸上競技だけではなく学業にも精を出した川面さんは、1年次には法職講座も受講。3年次からは「向上心のある人がいる環境に身を置きたい」と法科大学院進学者が多い福原紀彦教授のゼミにも所属した。

「中央大学のグラウンドが一番好き」と語る川面さん。自宅近くにも練習できる場所はあるが、春からも1時間以上かけて中大グラウンドに練習に訪れる。目指すはロンドン五輪出場。「目標は100m9秒台」と前を見据え続けている。(渡辺)

# U-23日本代表DFで海外転戦

## プロ選手としてW杯出場を目指す

経済学部 大岩一貴さん(中京大学付属中京高校出身)



ロンドンオリンピックアジア最終予選のU-23日本代表のメンバー(DF)として、海外を転戦、

気が抜けない毎日が続いている。取材した日の2日前に日本代表トレーニングキャンプ地のグアムから帰国

のアンマンに飛ぶ。

「幼稚園の時からサッカー選手に

なりたいと思っていました」という

大岩さん。その夢を現実を引き寄

せたいま

は、『もう

いいや』と

思った瞬間

終わり。気

持ちをどれ

だけ保てる

かが重要で

す」とプロ

選手として

の自覚を強

調する。

小学生の

ころから地

元のサッ

カークラブに所属し、高校時代はイ

ンターハイに2度、全国高校生選手

権大会にも3度出場。中央大学に入

学し、この4年間、毎日練習に励ん

だ。それが結実し、第26回ユニバー

シアード競技大会で優勝し、U-22

日本代表、そしてU-23日本代表に

招集された。今春からはジェフユナ

イテッド市原・千葉でプレーするこ

とが決まっている。

サッカー選手として順調に進んで

いるように見える大岩さんだが、「自

分は雑草です」と強調する。高校時

代は日本代表など手に届かないレベ

ルにあり、大学入学当初もサッカー

部のメインであるAチームでなくB

チームだった。しかし、その悔しさ

をバネにし、大学時代は人一倍努力

したという。

「休みの日は一人でボールを蹴つ

たり、みんなが休んでいるときも基

礎練習をしたり、小さなことでも毎

日コツコツ積み重ねたことが後々大

きな差になったと思います」

幼稚園当時からサッカー漬けの毎

日だが、今日まで向上、心を持ち続

けることにぶれることは一度もな

かった。「とにかくサッカーが好きで

サッカーより楽しいものを見つけた

ことができなかつたんです」と笑う。

ただ、学業とサッカーの両立は大

変だった。特にU-22日本代表はプ

ロ選手が中心のチームなので大学の

テスト期間と試合の時期が被ること

もあつた。それでも「大学生活を通

して、人間的に自立できました。親

元を離れ、サッカー部の主将になり

メンタル面・技術面ともに向上しま

した」と振り返る。

「自分の理想はまだまだ高くて、

もっともっと進化したい。忙しいな

か、自分のサッカーのために時間を

たくさん割いてくれた両親に、恩返

しをしたい。今の夢は、まずプロの

試合に出て、活躍し、そしてW杯に

出ることです」

競争は激しいが、フル代表に手の

届くところまで来ている。取材終了

後、「これから試合のために海外へ

行ってきます」と笑顔でその場を

去った大岩さんは、目標を高く掲げ、

新たな挑戦を続ける。

(野村)

# 3年次に全日本卓球の混合ダブルスで初優勝 勝利の喜びに浸るため、苦にせず練習に精励

文学部 坂本夕佳さん(岡山県立就実高校出身)



「2位と1位では雲泥の差。優勝以外で喜んだことは一度もありません」。穏やかながらも芯のある口調でこう語る坂本さん

は、昨年1月に行われた全日本卓球選手権大会の混合ダブルスで、1年先輩の瀬山辰男さん(2011年経済学部卒)とコンビを組み、見事初優勝を果たした。

決勝は前年覇者の松平健太(早大)、石川佳純(ミキハウス)組との対戦になったが、

「世界トップレベルの相手でも恐れは全くありませんでした。本番は思い切つ

たプレーが出来てよかったです」と笑顔で振り返る。だが、中央大学の学生ペアにとって初の快挙となった全日本選手権混合ダブルスでの優勝の裏には、壮絶な努力の積み重ねがあった。

「卓球を始めたのは小学校1年生から。兄のプレーを見て憧れたのがきっかけです。それからはずっと卓球漬けの毎日です」という坂本さんは、小学校2年次には全国で活躍するまでになった。とはいえ日本一になる道は険しかった。

小学校高学年になって「絶対負けたくない」という強い闘争心が芽生え、中学校、高校時代は朝から晩まで卓球の練習に打ち込んだ。「常に勝ちたいという気持ちを持っていたので、練習はすべて楽しいものでした」と厳しい練習も苦にならなかった。

「勝った時はお世話になった監督や仲間がみんな喜んでくれます。やっと恩返しが出来たと思います」と勝利の喜びは何よりも勝ることを強調する。大学4年の春季関東学生

リーグで、中央大学は女子1部で優勝した。坂本さんは「全日本の混合ダブルスで優勝した後も勝ちたいという気持ちを忘れずに練習を続け、関東リーグでも結果を残せました」と笑顔で話す。

卒業後は、卓球用具のメーカーに入社し、選手をサポートする。選手生活で培ってきた知識や経験を生かし、これまでとは違った方向から卓球に関わっていくつもりだ。選手生活にピリオドを打つことにしたのは、「中途半端な気持ちでやりたくない」からだ。「日本一を目指して練習してきたので、遊びではやりたくない」と決断するのは早かった。

「大学4年間は楽しいことばかりでした。監督や仲間にも恵まれ、泣いたり笑ったりしながらここまできました。中大でやってきたからこそ優勝できたんです」。そう語る坂本さんは中央大学への感謝の気持ちを忘れずに、今春、社会に大きく一歩を踏み出す。

(小笠原)